

照)という出入り自由な座談会ができ、柳虹は広島見甫らとともにその牛耳をとった。

以上の外に文筆に秀でた生徒は多々あったが、そのなかの一人をあげるとすれば田辺孝次である。彼は柳虹と同期の彫刻科生徒で、岩村透に文才を買われて『美術新報』記者、『美術週報』編集主任となった。校友会月報にも実名ないし「た・か生」の筆名で散文、詩、戯曲、展覧会評などを頻りに寄稿している。彼もまた文学部の立役者の一人であったと考えられる。

文学部は高村豊周が卒業した頃からさびれ、一時期詩文会(大正六年大村西崖の懇通により日本画科生徒が中心になって創設した漢詩・漢文の研究会)の活動があったものの、昔日の悌は失われた。大正九年に至って文芸部と改称され、再度復活が図られる。

#### ⑨ 東京勸業博覧会

明治四十年三月二十日から同年七月三十一日にかけて上野公園内に設けられた三つの会場で東京府主催の勸業博覧会が開催された。出品部門は十九部に分かれ、第一部が教育・学芸、第二部が美術(絵画、彫刻、美術工芸)、第三部が図案画であった。本校では正木直彦校長が美術および美術工芸部の審査部長に任命されたのをはじめとして多くの教官が審査員となり、学校としては第一部へ成績品を出品し、教官、卒業生、生徒らは個々に第二部へ出品した。また、学校の依頼製作事業の一環として会場装飾用彫刻の製作にあたり、積極的に協力した(364、369頁記事参照)。

美術の部門は、東京府主催の博覧会であったために東京在住者の

出品が大半を占め、また、五浦移転後日の浅い日本美術院の面々は出品せず、彫刻の部門で北村四海が擬賞に対する不満から自作の大石像「霞」を破壊するというセンセーショナルな事件が起こった。しかし、出品は盛況で、川合玉堂の「二日月」(一等賞一席)をはじめ、岡田三郎助の「某婦人の肖像」、和田英作の「斜陽」、中村不折の「建国勲業」等々の話題作が注目を集めた。青木繁の「わだつみのいろこの宮」が出品されたのもこのときであったが、これは三等賞末席に終わった。

本校関係者の出品を見ると、日本画では教授荒木寛畝が得意の花鳥画「孔雀」を出品し、同寺崎広業は「王摩詰」、同川端玉章は「富士」、助教教授結城素明は「蝦蟇仙人」を出品。卒業生では本多天城(佑輔。二十六年卒)、渡辺香涯(啓三。三十年卒)、渡辺萊渚(吉太郎。三十四年卒)、前波鶴年(寛次郎。同)、平田松堂(栄二。三十九年卒)、平木清光(弥一郎。同)、水上泰生(同。研究科)等が、また、在校生では桐谷洗鱗(長之助。卒業期生)、武藤直信(四年生)等が出品している。西洋画では教授岡田三郎助、同和田英作が前記の作を、助教教授小林万吾は「静」、同長原孝太郎は「停車場の夜」を出品。卒業生では山本森之助(三十二年卒)、中沢弘光(三十三年卒)、椎塚修房(同)、萩生田文太郎(同)、青木繁(三十七年卒)、橋本邦助(三十六年卒。研究科)、児島虎次郎(三十七年卒。研究科)等が、在校生では渡辺省三(卒業期生)、青山熊次(四年生)、紺野三郎(三年生)、九里四郎(同)らの出品があった。彫刻では教授高村光雲の「木彫像郭子儀」、同石川光明の「木彫群羊扁額」、同白井雨山の「乾漆像力士扛鼎」、同竹内久一「木彫観世音立像」、助教教授黒岩淡哉「石膏像嫦娥」、同水谷佳園

「石膏像乙女」、雇教員沼田一雅「鑄銅獅子」等の出品があり、卒業生では山田政治（三十二年卒）、長愛之（同）、山崎和沾（巳之助。三十四年卒）、青木外吉（同）、毛利教武（三十六年卒）、竹内友吉（三十八年卒。研究科）等が、また、在校生の朝倉文夫（卒業期）が出品した。美術工芸では教授海野勝珉の「銀製葛蘿小禽彫刻大花盤」、同海野美盛の「麗銀猊犬彫刻小箱」、囑託大島如雲の「鑄銅游鯉紋大膽瓶」、同香取秀真の「鑄銅獅子香炉」、同平田宗幸の「鎚銀雄鷄置物」、同藤本万作の「銀製梅鶯切嵌菓子器」等の出品があり、卒業生では板谷波山（嘉七。二十七年卒）、海野珉乗（豊太郎。三十年卒）等が出品した。図案では前出結城素明が「裝飾図案椿の花」を出品したほか、卒業生の伊藤豊吉（三十八年卒）、橋口五葉（清。同）等が、在校生では古田龍児（立次。四年生）、加藤卓爾（三年生）、日吉守（同）、広瀬尋常（同）、千熊宇平（一年生）等が出品した。以上は『東京美術学校校友会月報』第六卷第一号所載受賞者録によるもので、このほかにも本校関係者の出品があったものと考えられる。

この博覧会では本校が依嘱製作事業の一環として製作した東京全市模型、日本橋雛形裝飾彫刻人物二軀、噴水彫刻一式、工芸館ニッヂ彫刻人物一式等も展示された。ほかに高村光雲個人の製作品である穴織・呉織像、白井雨山個人の製作品である記念銅像標本等も据えつけられた。これらについては詳しい記録がなく、ただ雑誌に次のような記事を見出すのみである。

▲模造日本橋 將來架設せらるべき日本橋の模型に基き縮小して建設したるものなり、此の場所は竹の臺より凌雲院側なる美術館

及び第三號館へ接續する通路なれば會場に入たるものは必ず往返二回は通行すべく又橋上を裝飾すべき歴史的人物の塑像は美術學校にて現に製作中なり 尙東京市にては此模型の傍らに投書箱を掲げ置き廣く公衆の意見を徴して將來の參考に供する筈なり。

『絵画叢誌』第二三七号。明治四十年一月

▲日本橋の模型 今の日本橋に代つて架設せらるべき將來の日本橋の模型が東京博覽會場内竹の臺より新公園に至る道路に架設せられ目下工事中なる事は既に報せしが此模型は實物の三分の一にして長八間、巾三間、左右兩側の中央へ太田道灌と徳川家康との像を建設する筈にて實物は鑄銅なるも模型は乾漆製にて其原型は高村光雲主任となり白井〔雨山〕<sup>保</sup>黒岩〔淡哉〕二教授専ら製作に従事し服裝其他の古實は關安之助擔當し乾漆は唐杉梧竹製作する事と決し道灌は原型既に竣成せるを以て去七日唐杉氏方へ廻送し家康は目下製作中にて其容貌取調の爲め黒岩氏は同八日埼玉地方へ出張したる筈なり 之に就き高田<sup>村</sup>主任の談に此像は實物の三分の一なれば高さ三寸五尺位なるべく従つて見た目は一寸見すばらしく感ぜらるべきが觀覽者も此像と同じ三分の一の大きさになつて觀られんことを望むと。

（同誌第二三八号。同年二月）

▲大噴水塔の落成 第一號館後方廣場に築造の大噴水塔は六角形五段の人造石にて上部の臺柱は圓形とし其上に東京美術學校の製作に係る女神の石膏像を置き六角型石段の上部には大小十二個の

（『書画骨董雜誌』第六号。明治四十年四月）

（『美術新報』第六卷第二号。明治四十年五月五日）

(同誌第六卷第三号。同年同月二十日)

これらの製作品のうち白井雨山原型の太田道灌像(乾漆)は東京芸術大学芸術資料館に収蔵されており、東京都庁前の太田道灌銅像も同一原型を参考にして作られた。なお、改築日本橋の装飾はその後変更して渡辺長男原型の獅子と麒麟の銅像が取り付けられた(明治四十四年)。

⑩ 文展開設

明治四十年秋、第一回文部省美術展覧会(文展)が開催された。この官設展覧会の開設について正木直彦は次のように記している。

話が少々前後するやうであるが、明治三十三年に獨逸に居つた時、私は岡田良平、福原鐮二郎の兩君と共に、<sup>「オーストリア」</sup> 壙太利を訪れたことがあつた。其の時、壙太利の公使は牧野伸顯さんで、<sup>「イタリー」</sup> 伊太利から轉じられたばかりの處であつた。

會つて話して見ると、大層美術のことに趣味を持つてをられ、且つ歐洲各國の美術施設にも精通してをることが判つた。しかも牧野さんは、其の時、吾々三人が揃つて文部省の役人であつた爲か、しきりに日本に於ても文部省あたりで、美術の奨勵法を講ずべきであるとして説せられ、それに就いては是非、<sup>「フランス」</sup> 佛蘭西のサロンの如きものを文部省が主催すべきである、と云はれたのであつた。

勿論、吾々はこれに大いに賛意を表し、其々その實現に努むべ

⑩ 文展開設

明治四十年秋、第一回文部省美術展覧会(文展)が開催された。この官設展覧会の開設について正木直彦は次のように記している。

話が少々前後するやうであるが、明治三十三年に獨逸に居つた時、私は岡田良平、福原鐮二郎の兩君と共に、<sup>（オーストリア）</sup> 塊太利を訪れたことがあつた。其の時、塊太利の公使は牧野伸顯さんで、<sup>（イタリヤ）</sup> 伊太利から轉じられたばかりの處であつた。

會つて話して見ると、大層美術のことに趣味を持つてをられ、且つ歐洲各國の美術施設にも精通してをることが判つた。しかも牧野さんは、其の時、吾々三人が揃つて文部省の役人であつた爲か、しきりに日本に於ても文部省あたりで、美術の奨勵法を講ずべきであると力説せられ、それに就いては是非、佛蘭西のサロンの如きものを文部省が主催すべきである、と云はれたのであつた。

勿論、吾々はこれに大いに賛意を表し、共々その實現に努むべ